

巻頭言

教育課程における高大接続の名古屋大学モデルを

校長 松田武雄

本校の校長に着任して4か月が過ぎ、学校経営にかかわることはある程度把握できるようになったが、肝心の教育活動やカリキュラムについては、まだ粗筋しかつかめず、本校の特色である総合人間科や協同的探究学習などについて理解できているとは言えない。実際に授業を観察して、どのように授業が実践されているのかを観察したいと思うのだが、大学の仕事が多忙で、1学期はそれができなかった。2学期は、ぜひとも授業に参加して、附属中・高等学校の特色ある授業実践を学びたいと思う。

ところで、私の目下の関心事は、高大接続について、単に入試システムだけを検討するのではなく、教育課程における高大接続の在り方を研究したいということである。その問題意識の背景の一つには、私が教育発達科学研究科長・教育学部長を務めていた時に作成した「ミッションの再定義」がある。

2012年8月28日に出された中央教育審議会答申「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～」において、「学士課程教育の質的転換に取り組むことが重要」であることが謳われた。その翌年、国立大学改革プランにおいて、「各大学の強み・特色・社会的役割（ミッション）を整理」して、各部署の「ミッションの再定義」を作成しなさいという文科省からの指示が下りてきた。研究科長に着任して私の最初の仕事が「ミッションの再定義」の作成となり、その文書の中で、文科省の指示により、本研究科が「我が国の学士課程教育の質的転換を先導する」という文言を入れることになった。「先導」という文言の重みは大きく、研究科長の私にとって大学の教育課程改革が重要な任務となったのである。ちなみに「先導」という文言を入れることになっ

たのは本学部だけであり、他大学は単に「質的転換に取り組む」という表現であったことを後で知った。

この同じ答申の中で、「答えのない問題に対して自ら解を見出していく主体的学修の方法や、想定外の困難に際して的確な判断力を発揮できるための教養、知識、経験を総合的に獲得することのできる教育方法を開発し、実践していくことが必要である。」という記述があり、これはまさに名大附属が実践していた教育方法であると思った。つまり、大学よりも附属学校の方が、答申の内容を先取りして実践していたのである。私はその時から附属学校の総合人間科や協同的探究学習、スーパーサイエンスハイスクールの実践に着目し、そうした付属の教育実践を名古屋大学の学士課程教育に接続させたいと考えていた。それが、「学士課程教育の質的転換」につながるであろうと思ったのである。

研究科長最後の仕事として高大接続研究センターを設立したのも、入試システムの改革が主たる目的であったが、教育課程の高大接続ももう一つの柱であった。現在のところ、そのような狙いはうまく進んでいないが、まずは校長として、附属学校の先導的な教育実践を研究することが必要であると考えている。

本校は昨年度からスーパーグローバルハイスクールに指定され、今年度は、3期目のスーパーサイエンスハイスクールに指定されて、ますます名大附属学校の実践的理論的役割は大きくなっている。名古屋大学は、このような先導的な附属学校を有しているのは大きな強みであり、そのことを生かして、高大接続の名古屋大学モデルをつくりたいものだと思う。

2016年7月30日